

わたしとはるくんとたつくん

犬山市立犬山西小学校一年
市原由莉乃

わたしには、はるくんたつくんというふたごのおとうと
がいます。

はるくんとたつくんには、生まれたときからちてきしよ
うがいがあります。はるくんたつくんはいまらさいです。
ほんとうは、ねんちゅうさんのとしだけまだようちえん
もほいくえんもいっていません。

はるくんたつくんは、まだおしゃべりができません。た
まにきゅうにないたりすることがあつて「まる」こともあ
ります。なにをつたえたいのかわからないからです。はる
くんたつくんは、ごはんもてたべるし、これもいけな
いのでまだおむつをはいています。できないことがたくさ
んあるけどすこしずつわかることもふえてきました。

わたしがはるくんをだっこするとたまにはるくんのほ
うからもぎゅうつてしてくれれます。そのときわたしは、は
るくんのことをかわいいなとおもいます。はるくんは、お
しゃべりができないけど、うれしいとおもっているのか

な。

たつくんは、わたしがいすにすわっているときとなり
があいているとすわりにきて、わたしのかおをみてわらい
ます。きつとたつくんは、こつちをむいてあそんでほし
とおもっているのかな。

はるくんとたつくんは、おしゃべりができないかわりに
わらったりないたりしてわたしにきもちをつたえている
きがします。はるくんたつくんがわらつてくれるとうれし
いし、ないているとどうしたのかなとしんぱいになりま
す。

わたしは、いつもだいじなものをとられたり、わたしの
おかしをたべられたりするの、「いやだなあ、たいへんだ
なあ」とおもいます。でも、このさくぶんではるくんたつく
んのことをいつもよりかんがえてみて、やつぱりかわい
いとおとうとがいてよかったです。はるくんたつくんはおし
ゃべりができないけど、いままでわたしにいろいろなきもちを

つたえてくれていたんだなときびぎまりました。

わたしはこれからかぞくみんなでなかよくくらし
たいです。

カナダのバリアフリーを発見

はっけん

茨城大学教育学部附属小学校六年

鐘 築 千 花

私は今年の6月までカナダのモントリオールに2年間留学していました。この小学校の生活で、さまざまなバリアフリーに接しました。

私の心にもっとも強く印象深いバリアフリーは、先生も生徒もお互いに助け合うという姿勢を持ち合っていることでした。

たとえば次のようなことがありました。転校当初、私は英語で話すことも読むこともほとんどできませんでした。それで私の担任の先生がタブレットを貸してくれて、私に簡単な英会話を身につけるよう教えてくれ、相手の言うことと自分の考えを伝えることが、だんだんとできるようになりました。同級生のSさんと英語で話せるようになって、いつしか彼女は私の親友となりました。また隣の席のFさんは私に正しい英語の表現や発音を教えてくれました。

また、学校へ行くバスの中へ、車いすやベビーカーを

このことは私には驚きであり、新鮮な体験と感じられました。

転校してきたEさんという女の子は、片方の目が不自由で、耳にも障害がある子で、手話もほとんどできない子でした。クラスの他の生徒と生活を共にする中で、Eさんは人の頭の毛をひっぱったり、私の友人を壁に押しついたりといういろいろなトラブルをひき起こしていました。こんな状態の中で、S先生は、彼女に手話を教えたり、やっていい事とやってはいけない事の区別をしんぼう強く教え導いていました。同時に他の生徒達もS先生から手話のやり方を教えてもらいEさんとの意志のそ通を計ろうと考えていました。けっこうクラスの生徒も手話をいろいろと覚えて使えるようになりました。このようにして、Eさんが皆がいやがる事をした場合でも、お互いに手話を通して意志の確認を行なつて事態の解決へとつながっていったのでした。ここに、お互いに助け合う気持ちの大切さを実感できたのでした。

このようにバリアフリーの大切さを私はカナダに来て理解できるようになりました。このバリアフリーは、階段や廊下やトイレなどの設備に関するものだけではなく、人の心の中のバリアを取り除くもので、障害者と健常者がお互いに手話などを通してしっかりとコミュニケーションを取るこの大切さを共有するという意味でのバリア

使った人が乗りこんでくる様子を見て、日本とは違うなと思いました。カナダでは車いすやベビーカーを使っている人はバスの前のドアから乗り込んできます。なぜならバスの中には車いすやベビーカーを置けるスペースがあるのです。その上カナダでは車イスの移動や設置を手伝ってくれる人がいて、その親切心にはやさしきを感じます。一方、日本では車イスの人は自分でいろいろなことをしなくてはならなくて、バスの座席をたたんだり、置き場所へ設置するなど他人にたのめないのが現実です。

私がカナダに来て2年目の6年生になった時のことです。Eさんという女の子が4年生のクラスに転校してきました。日本だったら目が不自由な人は盲学校へ行き、耳の不自由な人はろう学校へ行くはずですが、つまり、障害のある人は健常者の通う学校へは入学できないはずですが、私の通っていたカナダの学校では障害のある生徒でも受け入れて普通の人と同じ環境で学習が可能なのでした。

フリーなのだとは強く感じ取りました。

これらの経験から私は思いました。バリアフリーを現実の設備や道具だけでなく人間の心にもまで及ぼして、私が大人になったら身体に不自由さをもつ人々に寄りそい、お互いに助け合う社会を実現してゆきたいのだと強く願っています。

体けんして学んだ事こと

仙台市立北仙台小学校三年
中野莉央おのなか

学校のじゅぎょうで、「じどう館をたんけんしよう」というのがあり、じどう館の中を見学させてもらいました。じどう館の中には、色々な物があったけど、わたしが気になったのは、しょうがいがある人のための物がたくさんあることでした。

点字ブロックや車イス、手すりの点字、スロープ、しょうがい者用のトイレ、高さがひくかったり、ボタンが下にある自動はん売きなどです。

点字が気になったので、家に帰ってお母さんにつたえて、点字を買ってもらいました。点字のいちらん表を見ながら、少しは、文章が書けるようになりました。だけど、出来た点字をゆびでふれてみても、ゆびだけでは、どうしても字を読み取る事ができませんでした。点字を読めるようになった人は、すごいなあと思いました。

夏休みに入ってから、じどう館にあった点字が何と書かれていたのか気になったので、点字の本を持って行ってみ

ました。

エレベーターの近くには、点字でエレベーターの注意が書かれていて、エレベーターのボタンにも、上や下と書かれていました。手すりの点字には、二かいと場所が書かれていました。目を閉じて二かいから三かいへ、手すりだけをたよりに上がって行ってみたら、かいだんが終わっていたのに、まだ続いていると思つて、ころんでしまいそうになりました。よく見ると、かいだんの始まりと終わりをしめす点字ブロックがあり、足と手をたよりにおりてみたら、ころばずにおりることができました。

じどう館の人に点字を見たくて来た事をつたえたら、車イスもかしてくれました。車イスにのるのははじめてだったので、さいしょは曲がるのがむずかしくてたいへんだつたけれど、何度もれん習をしたら、上手にい動することが出来ました。でも、うではつかれていたくなつてしまいました。エレベーターに車イスのままのれん習もしてみま

したが、小さいエレベーターだったので回る事ができず、こまっていたら、

「おくのかがみを見て、後ろ向きで出てごらん。」
と、お母さんが教えてくれました。かがみを見ながら後ろ向きでおるのは、回るより、ずっとかんたんに出来ました。

点字ブロックに自てん車があったり、スロープにくつがぬがれていたら、しょうがいがある人のめいわくになる事は分かっていたけれど、エレベーターの中のかがみの前に立つ事もめいわくになっていた事に、はじめて気がつきました。

自分がしょうがい者になった事をそうぞうすると、外に出る事がとてもこわいです。めいわくな事がたくさんあると、本当にこわいと思います。今までしょうがいについて色々勉強してきたけれど、今回、しょうがい者の体けんをして、はじめて学んだ事もありました。

これからは、しょうがいのある人が、こわいと思わないで行きたい所へ行けるように、気をつけてすごしたいと思っています。

ぼくの大切なお姉ちゃん

相模原市立清新小学校 四年
萩生田 哲汰

ぼくには、障がいのあるお姉ちゃんがあります。小さいころは、お姉ちゃんに障がいがあるとは、感じなかったけれど、今はお姉ちゃんに障がいがあるんだなと感じることが多いです。家にいる時にはあまり感じないけれど、家の外に出ると、コミュニケーションをとれない家族とてもコミュニケーションをとれなくなります。ぼくにはあまりうるさいと感じない車の音や知らない子供の声などが、ぼくが感じているよりもつとうるさく感じていて、聞きなれている家族の声が聞きとりにくくなるからコミュニケーションがとれなくなるんだと思います。

でも、お姉ちゃんが家以外ですごしやすい場所もあります。いつも通っているしえん学校や放課後等デイサービス、リハビリをしてくれる所です。どうして家族以外といつしよにいるのにすごしやすいのか、一つ目はお姉ちゃんの好き、きらい、やりたいこと、やりたくないことを理かいてしてくれている人がいるからです。二つ目は、お姉ちゃん

んが話せなくてもしせん、サイン、表情で気持ちを表わしてそれを読み取ってくれる人がいるからです。三つ目は、みんなが笑顔でせつしてくれているからだ。ぼくは、思います。

限られた所でしか安心できないお姉ちゃんにとって生きにくい世の中なのかなと思います。

お姉ちゃんが少しでも生きやすいと思える世の中にするためには、みんなにお姉ちゃんのことを理かいてもらうのが一番だなと思うけれど知らない人にまで分かってもらうのは、むずかしいのでお姉ちゃんだけでなく、世の中には同じように障がいをもっていて困っている人がいるということも知ってもらいたいです。

みんなが自分とちがう、色んな人がいるということを知ってもらっただけで障がいのある人も、ない人も、やさしい気持ちをもつて人にせつすることができると思います。そんなやさしい思いやりがたくさんな世の中になれば障

がいのある人となない人の心の輪が広がると思います。

僕たちはかわいそうじゃない

島原市立第一小学校六年
林 真己

僕には病気がある。それは、先天性ミオパチーだ。ミオパチーとは、筋力が弱い、筋力低下、つかれやすい、偏平足、十分睡眠をとつても日中眠いなど、いろいろな症状がある。簡単に言うと、筋肉が周りの人と違う特徴を持っているということだ。

僕は三人兄弟の末っ子として生まれた。兄も姉も僕と同じ病気を持っていた。普通この病気は兄弟で発症すると同じ症状が出るらしい。だが、僕たちは遺伝子の組み合わせがうまくいかず、みんな違う病状が出た。兄と姉は僕と違いとにかく肉がつかなかった。筋肉もつかなかったので種類は違うが症状が多かった。僕は幸い兄や姉に比べて症状が少なかった。だから、サポートがたくさん必要だった兄たちのサポートをすることが多かった。

兄たちの手伝いを頼まれることが小さい頃は嬉しかった。だが、三年生になってすぐの頃、不満が沸いてきた。なぜ僕がしなければいけないの？僕も同じ病気なのに。いろ

いろな不満が頂点に達した。僕は兄たちのサポートをしなくなった。

そして、その年の春休み、家族で旅行した時、神社があるちよつとした山を登ろうということになった。その時に僕は姉を待たすに先に登っていった。僕が頂上についてしばらくして姉は頂上に着いた。僕はもう待ちくたびれていた。だから、姉が着いた途端下り始めた。だいぶ待つて姉が僕のもとへ来て言った。

「疲れたから少し休ませてほしい。」

僕は、少し待つたが早く車に戻りたかったので姉に、

「まだ？暑いから車に戻りたい。」

と、言った。姉は、

「もう少し待つて。」

と言った。だが待てなかった。僕は姉を急かして車にもどった。その後もいろいろなところを回った。でも、姉は車で待つと言つて、留守番をした。不思議に思い聞くと、

「これ以上歩いたら、股関節が痛くなって、何日も歩けなくなる。真己は元気でしょ？でも、お姉ちゃんは歩きたいけど無理なの。」

と答えた。そこで僕は、はつとした。姉も兄もしたくてもできないことがあるのた。僕は姉たちに比べて、たくさんことができるのだから、姉たちのサポートをしなくてはと思った。そして、手伝った後に姉たちから言われる「ありがとう」が嬉しかったのだ。そのことに気づいた。それから僕は、姉たちのサポートを自分から進んで行うようになった。

周りは僕たちを見て、かわいそう、大変だね、と思うかもしれない。確かに大変だ。だが、僕たちはかわいそうではない。僕たち兄弟は病気があつても関係ないくらい仲がいい。時にはライバルになり、周りの兄弟と変わらないのだ。そして、自分たちに病気があるからこそわかる気持ちもあるかもしれない。だから病気というだけで、かわいそうと言わないでほしい。

僕たちはかわいそうじゃない。病気を持つ良さもあるのだから。